

私にも 言わせて! 第163回

さまざまな分野や人に関わる 公衆衛生医師に自分らしい意義を感じて



石川県健康福祉部健康推進課

清水 華子

金沢市で生まれ育つ。2011年日本大学卒業。地域の病院に勤務する傍ら、産業医業務や健診業務にも携わる。2023年に石川県庁に入職し、2025年4月より現職。いしかわ社会医学系専門研修プログラム専攻医。趣味は韓国ドラマ鑑賞。

行政医として4年目を迎え、職場や県民の皆さまのお役に立たなければならぬ立場ではありますが、思うように順調に成長できているわけではありません。ただ、その中でも少しずつ見えてきたこともあります。また、自分自身について語る機会はありませんので、この機会に思い切ってお話ししてみたいと思います。どうぞお付き合いをお願いします。

行政に入る前は

振り返ってみると、さまざまなお仕事に興味を持ち過ぎてしまい、自分の視点や進む方向がなかなか定まらないまま医師生活を送ってきました。毎日、病院という限られた環境で働いていたこともあり、産業医として職場巡視で食品工場などを訪れた際には、まるで職場見学に来たかのように新鮮で、楽しい気持ちになったことを覚えています。しかし、興味を優先するあまり、自分の強みを持っていないまま、どこかネガティブな姿勢

で診療に向き合っていたように思います。それでも病院勤務時代には多くの思い出があります。診療が未熟で患者さんからお叱りを受けたこともありましたが、私の体調を気遣って栄養ドリンクを差し入れてくださる方もいました。普段の診察では素直な方も多く、可愛がっていた猫が亡くなった際には診察室で号泣された方もおられました。そうしたさまざまな患者さんとの出会い、関わる中で、むしろ自分の方が支えられていたのではないかと感じています。

行政に入った理由

あるきっかけで、県庁でも医師として働けることを今の上司に教えていただきました。特別に公衆衛生に強い関心があったわけではなく、自宅から県庁が近いことや、公務員という肩書を得られること、当直や緊急の呼び出しがほほえないこと、そして子どもがある程度の年齢に達するまでは15時半に帰宅できるといった、どちらかといえば打算的な理由から県庁への入職を決めました。

医療計画の策定

県庁に入職して1年目は、まず医療計画の策定に携わりました。医療法に基づき、県の医療の大きな方向性を示す重要な計画であるというところを、当初はまったく理解しておらず、後になって少しずつその重みを実感するようになりました。資

致命的な私ですが、時間をかけて工夫し、監査では納得してもらえらるうに対応しました。

余談になりますが、震災対応を振り返ると、県内外の支援者の熱意に十分応えられず、自分としては満足できなかった場面もありました。支援者の方々は、被災者のために強い思いを持ち、さまざまな支援策を提案してくださいました。しかし、前例がないことで調整がなかなかうまくいかず、一方で支援者のせつかくの思いを無駄にしたくないという気持ちもあり、このジレンマに何度も悩まされました。

健康推進課へ異動

2025年度からは、これまで担当していた地域医療政策関連の部門を離れ、健康関連の部門へ異動しました。担当する業務はこれまで通り糖尿病や循環器疾患に加え、新たにがん、難病、熱中症、歯科口腔関連、感染症などを扱う課で、毎日、同僚の保健師、管理栄養士、事務職の皆さんに支えられながら業務をこなしています。特に被災者健康調査の集計にも関わっており、苦手な統計についても一から参考書を読みなが

料作成や会議の準備など、すべてが初めての経験で苦勞の連続でした。計画の素案を何度も練り直し、2023年の年末には自分が担当する医療計画の最後の会議に臨み、委員の方々からおおむね合意を得ることができました。達成感に満たされ仕事納めを迎えたことを、今でもよく覚えています。

令和6年能登半島地震

年末はゆくり過ごすことができ、紅白を見ながら「県庁の仕事は思っていたより大変だな」などと家族にこぼしていました。そんな中、2024年1月1日、令和6年能登半島地震が発生しました。その時私は実家におり、直接の被災は免れましたが、これまで経験したことのないような強く長く続く揺れに大きな恐怖を感じました。発災当日はすでに夕方であったため、翌日、県庁に参集

ら学んでいるところです。

最後に

まだまだ若手として、日々慌ただしく動き回っていますが、自分の年齢がすでに人生の折り返し地点に差し掛かっていることは事実であり、日本が近代化する以前で例えると、すでに当時の平均寿命に達してしまっています。それでもこれまでほとんど病院にかかることなく過ごしてきたのは、公衆衛生の発展のおかげだと改めて感じるがあります。公衆衛生に尽力された諸先輩方のおかげで今の自分を含めた多くの人々の健康が保たれており、また、そのバトンを自分が引き継いでいると思うと、大変誇らしく思います。興味や関心が定まらなかつた私にとって、さまざまな分野に関わりながら、庁内から全国に及んで、多くの仲間と一緒に仕事ができる環境は、自分にとっていたのではないかと感じています。今後も機会があれば、さまざまな研修会等に積極的に参加していきたいと考えております。ご指導ご助言をいただけますと幸いですし、ぜひ気軽に親しくしていただければうれしく思います。

しました。すでに自衛隊や県内外から支援者が多数集まり、その光景に圧倒されました。そうした状況の中、私は医療計画の業務しか経験がありませんでしたが、まずは県のDMAT（災害派遣医療チーム）と共に透析患者の受け入れ調整に当たりました。主要幹線道路が寸断され、情報も錯綜する中で、透析が必要な患者さんを一刻も早く透析可能な医療機関へ搬送しなければならず、状況は非常に厳しいものでした。計画を立てても立ててもまったくその通りには進まず、終わりが見えない困難に、自分自身も周囲の職員も疲労はピークに達していました。しかし、透析が必要な被災者は3日間ですべて適切な医療機関に送ることができ、深夜であつても透析を稼働し続けてくださった医療機関の皆さまには、言葉に尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

透析のミッションが終了し、その次に携わったのは、1・5次避難所の運営でした。開設前日は、テントを張ったり、また、必要物品の整理を行い、開設当日は、早々に避難してこられた健康上に不安のある方を励ましたり、久しぶりに血圧を聴診で

測ったりしました。避難所の入所者が徐々に増えるにつれて、多くの支援団体も訪れるようになり、調整役としての役割が求められるようになりました。当時の私は行政医として医療計画の知識しか持つておらず、DHEAT（災害時健康危機管理支援チーム）が何であるかさえない知らない状態でした。その後、1・5次避難所に入られた各自自治体のDHEATの先生方からは、CSCAHHH（要配慮者の救護）やDHEATとは何か？から教えていただき、栃木県、群馬県、神奈川県、横浜市、岐阜県のDHEATの皆さまからの励ましで勇気づけられ、行政職としての仕事の進め方や姿勢を間近で学ばせていただく貴重な機会にもなつたと感じています。

震災対応のその後

避難所の避難者が徐々に減少し、私も通常業務へ戻るようになりました。地味な作業ではありましたが、1・5次避難所で使用した備品（血圧計など診療所運営に必要な物品）の費用を、災害救助費として整理する業務を庶務担当と一緒に行いました。数字が苦手で行行政職としては